

## パウロのエフェソ伝道

パウロの第3次伝道旅行は再びシリアのアンティオキアから始まった。先の二つの旅行でできたガラテヤおよびフルギア地方の諸教会を訪問して信徒たちをかづけた後、パウロは高地の旅を続けて小アジアの西海岸の大都会エフェソにやって来た。エフェソはアジア州の首都であり、政治的にも経済的にも、また宗教的にも全アジア州に影響力をもっていたので、その位置からして伝道戦略上の重要な町であった。エフェソからキリストの福音は周辺の方々に広まり、教会が拡大していくことになる。

そのエフェソで、使徒パウロはまず、12人からなる一群の弟子団に出会った。パウロは彼らが力ある聖霊の臨在をまったく知らないヨハネの弟子たちであることを知り、彼らをキリストの福音の真理の神髄にまで導いた。そして彼らに手を置くと、聖霊が彼らに下り、ペテロのときのように、聖霊の驚くべき感化のもとに、彼らは力強く神の言葉を語り出した。

エフェソにはユダヤ人の会堂があったため、いつものように彼は会堂に入ってユダヤ人同胞に伝道した。それは3ヶ月続いたが、ユダヤ人の大多数が心をかたくなにして福音を拒み、パウロに反対をし続けたので、彼は信じた者たちを連れて会堂から離れ、ティラノの講堂に移り、新たにそこを拠点に熱烈に伝道を展開していった。

ティラノの講堂というのは、恐らく哲学か修辞学を教えていたギリシヤ人の学校のことだ、その学校の空き時間に会場を借りたと思われる。ある写本によれば、彼は午前11時から午後4時まで毎日のように教えたのである。それが二年間も続いたので、アジア州に住む者は、ユダヤ人であれギリシヤ人であれ、誰もが主の言葉を聞いたと、ルカは記している（10節）。

ルカによれば、エフェソには「ユダヤ人の祈禱師」や「魔術を行なっている者」が多数いた（13、19節）。神はパウロの手によって異常な力ある業を次々と行なうことによってご自身の力を現し、魔術信仰の愚かさや迷信性を示されたが、それはエフェソの住民に一大センセーションを巻き起こした。

その結果、神への恐れが生じ、多くの者が自分の罪を告白して信者になった。さらに、魔術を行なっていた多くの者が、高価な魔術の本を持ち出してきたのは、みんなの前で焼き捨て、罪を悔い改めるといって、まさに霊的な一大覚醒運動が起った。地中海全域にその名を知られていたアルテミス礼拝の中心地であったエフェソは偶像礼拝と迷信の町であったが、そのただ中に起ったこの霊的変革は「神の力」を現す大きな出来事となった。こうして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増して行った（20節）。

「当てるも八卦、当たらぬも八卦」という。当てにもならぬものに人々は振り回されて不安に生き、当たったと言っては一喜し、外れたと言っては一憂する様子は、まさに人間の魂の不安状況を表し、人間が神なしには生きることができないことを示している。その人間の不安を利用してまじないや占いはびこる。パウロの時代から二千年たった今も人間の状況は変わらない。エフェソの時代は今の時代の象徴であり、エフェソの町は今の社会の象徴でもある。不安にかられて人々は占いやまじないに走る。自分の好みに合わせて神々を選び、それに魂をゆだねる。しかし、キリストの福音が伝えられるところ、偶像礼拝と迷信、まじないや占いからの解放が起るのである。